

第3回武蔵野市教育基本計画（仮称）策定委員会

○平成21年3月13日（金曜日）

○出席委員

葉養委員長 小島副委員長 小山田委員 松澤委員 本郷委員 安藤委員
田中委員 磯川委員 萱場委員

○事務局出席者

山上教育長 秋山教育企画課長 鈴木指導課長 吉原統括指導主事
大平教育支援課長 平岡給食課長 隅田指導主事

○日程

1 開会

2 議事

(1) 武蔵野市教育委員会における今後の施策展開の視点と方向性について

① 地域と協働した学校づくりについて

② 信頼される学校づくりについて

3 その他

第 3 回

武蔵野市教育基本計画（仮称）策定委員会

平成 2 1 年 3 月 1 3 日
於 市役所 4 1 3 会議室

武蔵野市教育委員会

午後 7時00分開会

○隅田指導主事 皆さん、こんばんは。

開会に先立ちまして、本日の配付資料を確認させていただきます。

事前に皆様を送付させていただいた資料が2つございます。資料1、武蔵野市教育委員会における施策展開の3つの視点と今後の施策の方向性について、資料2、学校評議員制度・学校運営協議会制度・学校支援地域本部の違いの2つでございます。また、本日追加でお配りした資料といたしまして、資料3、各制度等のイメージ図、それから資料4、「義務教育に関する意識調査結果報告書」よりというグラフです。資料5、第1回・第2回策定委員会における論議からの3つでございます。

ご確認いただければと思います。よろしいでしょうか。

それでは、葉養委員長、よろしくお願ひいたします。

○葉養委員長 こんにちは。ちょっと中央線が途中でとまってしまいまして、申しわけありません。もう少し早く着く予定だったんですが。

早速議事に入らせていただきまして、(1)武蔵野市教育委員会における今後の施策展開の視点と方向性について、この案件を検討させていただきたいと思います。

まず、事務局のほうから資料についてご説明をお願いしたいと思います。よろしくお願ひいたします。

○吉原統括指導主事 それでは、よろしくお願ひいたします。

では、きょうお手元にお配りしました資料の中で最後にお配りした資料、資料5をまずごらんいただけますでしょうか。第1回目、それから第2回目のこの策定委員会の中で委員の皆様にもいろいろとご議論いただいた、その主な論議からということで、A4縦の1枚の資料でございます。第1回目のときに事務局のほうから、武蔵野市における今後の施策展開の3つの視点ということで説明させていただきました。これまで2回委員会を行った中で、委員の皆様から非常に多角的にご意見を出していただいて、それをこの3つの視点に沿って少し意見をまとめさせたものでございます。

ちょっと資料のほうを見ていただきたいと思いますが、例えば視点1、「地域と協働した学校づくり」にかかわる主な意見として、そこの四角の中に幾つか書かせていただいております。例えば「開かれた学校づくり協議会」、武蔵野市のいわゆる学校評議員制度なんですけれども、これについてご意見を幾つかいただいて、「開かれた学校づくり協議会」が本来学校を応援すべきだけれども、まだ応援できるところまでいっていない、地域がもっと学校に入り込むべきではないかといったご意見。それから、その2つ下に、教員が地域の人ともっと接することで、教員のコミュニケーション能力が向上し

て、それがひいては教える力につながり、教える力も伸びていくことにつながっていくのではないかといったご意見もちょうだいいたしました。

それから、真ん中のところを見ていただくと、視点2のところですが、「信頼される学校づくり」についてのご意見です。前回第2回目のときに、学校評価に関して、いろいろな角度から委員の皆様にご議論いただきました。そこに少しまとめさせていただいた中に、例えば2つ目の○のところ、武蔵野市も非常に若い先生が今ふえているのですが、若手教員が多い学校では、例えば校長の経営方針を各教員の学級経営にどのように結びつけるのが課題になっているといったご意見。その2つ下、そもそも学校評価の趣旨とか目的について、教員や保護者、それから地域の方々の中でコンセンサスをきちんと得る必要があるのではないか、そもそも何のために評価するか、それからその評価の物差しをきちんと共有することが大切ではないかといったご意見をちょうだいいたしました。さらに、学校評価の結果はランキングとかレッテル張りではなく、全体の教育の質の向上、レベルアップにつなげていくべきであるといったご意見もちょうだいいたしました。

最後に視点3のところを見ていただくと、「本市の特性を生かした質の高い信頼される学校づくり」にかかわるご意見として、1回目のときに、いわゆる成果評価が問われている、費用対効果とあわせて、限られた財源の効果的活用が求められている、今そういう時代であるといったご意見。それから、公立学校としてのあり方、公立学校はどうあるべきかといった理念の共有が大切ではないか、それから公立学校のよさを大切にすることが必要ではないかといったご意見をいただきました。

それから、前回事務局のほうでデータをお示しして解説させていただいた中で、武蔵野市の地域性の中で、ともすると知の部分の比重が高くなりやすい面もあるのではないかと、子どもによっては点数評価の偏重が自信のなさにつながっている側面もあるのではないかとといったご意見をちょうだいいたしました。

このように、これまで2回のご議論の中で、この3つの視点に沿った意見をたくさんちょうだいいたしました。きょうは第3回目になるのですけれども、少しこの中で焦点を絞って具体的にご議論いただければありがたいと思っております。

では今度は資料1、最初に皆様にお配りした資料でございますけれども、A4横の資料です。武蔵野市教育委員会における施策展開の3つの視点と今後の施策の方向性についてという資料をごらんいただきたいと思っております。

一番左に、既に1回目のときにご説明させていただいた3つの視点、①、②、③、それからその右を見ていただくと、今後の施策の方向性として、アからオまで幾つか書か

せていただきました。

例えば、①のところを見ていただくと、「地域と協働した学校づくり」の中では、大学や企業等との連携、それから学校教育と社会教育の連携、それから社会教育施設（図書館、美術館等）の活用、それから教育委員会と市長部局との連携、それからオのところで、きょうは少し時間をとってご議論いただければと思っておりますが、本市の「開かれた学校づくり協議会」を中核とした学校支援のあり方といったところで方向性を少し書かせていただきました。さらにその右を見ていただくと、主な論点の整理ということで、先ほどの方向性を少し具体的に文章化したところを書かせていただいております。ですから、主として連携の仕組み、ネットワークのあり方といったところについてご意見をいただければと思います。それから、「開かれた学校づくり協議会」につきましては、既存の現在のこの協議会の機能を今後どのように見直していったらよいか、それから、そこに書いてございますが、学校支援のための組織やコーディネーター的な役割を担う人材のあり方といった形で論点を書かせていただきました。

それから、真ん中のところは、「信頼される学校づくり」ということで、前回もご意見をいただきましたが、若手教員の育成のところ、それからリーダー教員の養成、さらに学校としての組織マネジメントの推進、それから学校評価を生かした教育活動の改善、さらに保護者や地域住民の方の学校運営への参画ということで、①と②は当然ダブって、相互にリンクしてくるところもあるのですけれども、こういったところを方向性として書かせていただきました。さらに右を見ていただきますと、主な論点のところ、若手教員の育成のあり方、それからミドルリーダーの発掘や養成のあり方、また「開かれた学校づくり協議会」を保護者や地域の方の学校への参画という面でどう見直したらいいかといったところを書かせていただきました。それから、今はPDCAとよく言われますけれども、PD——計画・実施のところと比べると、CA——いわゆる評価・改善の部分がともすると学校教育の中ではこれまで課題があったとも言われておりますので、そういったサイクルを今後どのようにつくっていったらいいかということも少し論点として書かせていただきました。

最後の③のところ、本市の特性を生かした質の高い教育活動の充実のところは、今まで武蔵野が進めてきましたいろいろな施策や事業について、上の2つの視点を踏まえて改めて見直したときにどういう方向性が望まれるかといったことで、これは次の段階のご議論になっていくかと思っておりますが、書かせていただいております。

ですので、きょうは主に①と②の視点について、後ほどご意見をいただければと思っております。

では続いて、資料説明に移らせていただきます。資料2、それからきょう追加でお配りした資料3、学校評議員制度・学校運営協議会制度・学校支援地域本部の違いという資料、それから各制度等のイメージ図。実は資料2と資料3は、両方を照らして見ていただくと、資料2をよりイメージとして図式化したものが資料3と見ていただければと思っております。これも後ほどのご議論の中で参考資料として見ていただきたいと思います。

例えば、一番左の学校評議員制度、これは武蔵野市が今とっています「開かれた学校づくり協議会」が法的にはこの制度になりますけれども、その位置付けのところを見ていただくと、「校長が、必要に応じて学校運営に関する保護者や地域の方々の意見を聞くための制度。個人として意見を求めるものであるが、実際の運営上は学校評議員が一堂に会して意見を交換する例が見られる」ということで規定されております。さらに、ずっと下に目を移していただいて、主な内容というところですが、「学校評議員は、校長の求めに応じて、学校運営に関する意見を述べる」。それから、「学校評議員に意見を求める事項は、校長が判断する」ということで、これはあくまで委員の方が個人として個人の立場で学校に対して意見を述べるという制度の趣旨でございます。したがって、校長先生、それから教育委員会に関して、直接関与したり、拘束力のある決定を行うという組織ではないということで規定されております。

それから、真ん中の学校運営協議会制度のところをちょっと見ていただきたいと思います。これが設置された学校の通称としていわゆるコミュニティ・スクールという言葉が用いられておりますが、ここの位置付けのところを見ていただくと、「学校の運営について、教育委員会の下部組織として、一定範囲で法的な効果を持つ意志決定を行う合議制の機関である」ということで、位置付けが先ほどの学校評議員制度と異なるということでございます。法令上の根拠も、先ほどと異なった法令のもとに設置されております。さらに下を見ていただきますと、主な内容のところ、「以下の具体的な権限を有する」ということで、「①学校運営に関する基本方針について承認する。②学校の運営に関して教育委員会又は校長に対し、意見を述べることができる。③教職員の採用等に関して任命権者――都道府県教育委員会――に意見を述べることができ、任命権者はこれを尊重する」ということで、位置付け、そして内容が、先ほどの学校評議員とはかなり異なるというところがございます。

それから、一番右を見ていただくと、学校支援地域本部と書かれております。これは、文科省が平成20年度、今年度から国の事業として始めたものでございます。大きく言うと、地域住民の方がボランティアとして学校教育を支援する仕組みをつくるといった趣

旨でできた事業でございます。大きな特徴は、資格要件等のところを見ていただくと、大きく3つ要素があります。地域教育協議会、主に学校関係者や地域の代表者の方で構成されておりますが、これが一つ母体の推進組織ということでございます。それから、地域コーディネーター、学校と地域の実情に精通する方で、ボランティアの活動の連絡調整を行うという立場の人。それから、さらにその下に、地域支援ボランティア、学校支援活動に直接参加していただく地域のボランティアの方。一応この事業の趣旨として、この3つの要素が押さえられております。主な内容としましては、学校管理下のさまざまな教育活動の支援に入っただけということ、そこに例が書かれておりますが、学習支援、部活動支援、校内の環境整備、子どもの安全確保、学校行事等の支援ということで、いわゆる教育活動に具体的に直接支援に入っただけという事業でございます。

もう一つ、イメージ図のほうを見ていただくと、先ほどご説明した違いがもう少し図式化してごらんいただけるかと思っております。先ほど申し上げたように、一番左の学校評議員制度につきましては、主に学校が学校の経営方針や教育活動について説明して、「開かれた学校づくり協議会」の委員の方たちが個人として意見を述べるということで、個々の意見が反映されにくい面もあるという課題もあると思っております。

コミュニティ・スクールにつきましては、真ん中のイメージ図になりますけれども、大きな特徴は、合意形成や意志決定を行う機関であるということでございます。それから、先ほど申し上げたように、教職員人事についても都道府県——任命権者に対して一定の意見が言えるということです。ですから、当然、それに伴って校長先生の経営方針とか人事に関しても意見具申ができるということで、委員の方の影響力が大きいというところでございます。

それから、学校支援地域本部のほうは、図を見ていただきますと、先ほど申し上げたとおりなんです、例えば課題として、地域コーディネーターの方の適任者、こうした人材発掘や養成のこと、それからこの地域教育協議会の運営について、どこが担っていくかとか、それが新たな学校の負担にならないかといった課題も言われております。それから、何よりこの学校支援ボランティアというのは、この事業の中では、無償で純然たるボランティアとして活動に入っただけという制度で、財源的な保障はございません。それから、これは3年間限定の国事業ですので、その後のコーディネーターに対する謝金等の財源保障はまだ見られないといったところが課題として挙げられております。また後ほどのご議論の中で、今ご説明したこういった制度等についても参考にしていただいております。

最後に、追加でお配りしました資料4を見ていただきたいと思います。こちらは武蔵野市のデータではないんですけれども、平成17年に文科省が義務教育に関する意識調査を委託して行いました。その中でちょっときょうのご議論の参考になるかなと思います。用意したのは、そこに学校の指導や取り組みに対する満足度というところで棒グラフが出ております。実はこれは、保護者の学校に行く回数と、学校の指導や取り組みに対する満足度の相関関係を見るための一つの資料として提示されています。

上からずっと見ていただきますとすぐに目につくのは、例えば「運動会などのスポーツ活動」、それから「学芸会や音楽会などの文化活動」、これらについては全体的に満足度が非常に高いということが見てとれるかと思います。ところが、下のほうに目を移していただくと、例えば「学ぶ意欲を高めること」、それから「いじめや不登校問題への対応」、それから「受験に役立つ内容の学習指導」、それから「将来の進路や職業について考えさせること」、最後の「一人ひとりの学力や興味に応じた指導」ということについては、全体的に満足度が必ずしも高くないといった傾向が見られます。

さらに詳しく見ていくと、学校に行く回数と満足度には先ほど申し上げた相関関係が見られるのですけれども、正の相関が見られるものと、負の相関が見られるものがあります。例えば、「受験に役立つ内容の学習指導」というのが下から3つ目にございますけれども、これは非常におもしろいんですが、学校に行く回数が多い保護者ほど満足度が低いといった傾向も出ています。それから、正の相関が示されたものでいうと、「教科の基礎的な学習指導」とか、「学ぶ意欲を高めること」、それから「一人ひとりの学力や興味に応じた指導」、こういった項目についてはおおむね正の相関があったということです。それから、顕著なのは、「教科の基礎的な学習指導」を見ますと、学校に行く回数が「0～2回」の保護者と「10回以上」の保護者では約15ポイントの差がある。非常に満足度の差が大きいといった傾向も見られています。これは先ほど申し上げたようにあくまで国が行った意識調査の一つのデータですので、直接武蔵野市についてこれがすぐに当てはまるということはないかと思うんですが、後ほどのご議論の一つの参考資料としてご活用いただければと思います。

以上が資料説明なんですけれども、きょうは少し議論を絞っていただいて、「開かれた学校づくり協議会」のあり方、それから「信頼される学校づくり」ということで、武蔵野の保護者・地域に求められる信頼される学校のあり方等についてご意見をいただければと思います。

以上で資料説明は終わらせていただきます。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

当初の計画ですと、今回と次回あたりで一通り視点1から3までの議論を終わらせるような計画になっておりまして、5月・6月あたりは、施策の体系化、具体的施策の検討ということで考えられております。必ずしもこのスケジュールに拘泥する必要はないんですが、そのようなことをにらみながら、時間的に制約もございますので、ご意見をいただければと思います。

本日は、特に視点1の「地域と協働した学校づくり」の箇所と、2の「信頼される学校づくり」について、この2点について集中的にご意見を承りたいと思います。前回は振り返りますと、特に2の「信頼される学校づくり」に関連した学校評価の箇所に議論が集中したような印象がございますけれども、1と2というのは恐らく緊密に結びついている問題だろうと思いますけれども、とりあえず1の「地域と協働した学校づくり」についてということで、こちらのほうから入らせていただきたいと思います。必ずしも区分けして議論する必要はないんですが、一応切り口として「地域と協働した学校づくり」ということで資料が用意されておりますので、こっちのほうからまず入らせていただければと思います。

それでは、まず最初に、説明につきまして、おわかりになりにくかった箇所がございましたら承りたいんですが、いかがでしょうか。資料説明について、このところをもう少し説明してほしいといった箇所がございましたらお願いしたいと思うんですが、いかがでしょうか。何かございますでしょうか。はい、どうぞ。

- 小島副委員長 資料2に学校評議員制度の目的があります。この目的というのは、学校教育法施行規則の第49条に示されている目的なんですか。それとも、武蔵野市がこの学校評議員制度を導入するに当たって、武蔵野市の目的といいますか、法にかぶせてつくったものなんですか。
- 吉原統括指導主事 これは、法的な根拠に基づいて書かせていただいた目的ですので、特に武蔵野市のということではございません。
- 小島副委員長 要するに、「開かれた学校づくり」というのは、形式であって、本来、学校が教育目標を達成するために保護者や地域が学校と一緒にやっていくんだという、学習指導要領の総則が改正されていますね。その部分とこれとはちょっと矛盾してきますよね。開かれた学校をつくるためにこういう評議員制度があるのではなくて、学校の教育目標を達成するためにこういう制度があるんだと。そのように考えると、この1の「地域と協働した学校づくり」というのは何のためということですか。学校をつくるために連携するわけじゃないんですね。多分、子どもの教育活動を充実させるためということだとすると、学校づくりのために家庭と地域と大学と企業が連携するというのは、

ちょっとよじれているような気がするんですけども、どんなものでしょうか。

○葉養委員長 意見とちょっと絡んでおりますので、またこの点については本題のほうで引き続きお願いしたいと思いますけれども、何か説明についてもう少しお聞きしたいということはございますか。今は、学校評議員制度とか、この枠の中の説明が、武蔵野市独自のものか、法令に準拠したものかという質問がございまして、法令に準拠したものというご説明でしたけれども、ほかにはございませんでしょうか。よろしゅうございますか。

それでは、これからはご自由に意見を開陳していただくような時間にさせていただきますと思います。

今、小島先生のほうからそういうご指摘がありまして、これは意見をお互いにディスカッションとして展開していくという箇所の課題提起だと思うんですが、いかがでしょうか、ほかの委員さんは。入り口のところで、まず学校と地域の協働という、「地域と協働した学校づくり」となっているけれども、この入り口そのものについて、少し、なぜ地域と協働なのかというあたりを踏まえた議論も必要なのではないかというご意見だろうと思います。事務局のほうで何かこれについてコメントがありますか。意見が出ないようなところですが、指導要領との関係も出てきましたけれども。

○吉原統括指導主事 指導要領が改定になって、そもそものこの評議員制度の趣旨と、今の指導要領改定後のところが、若干確かに法改正のもとに変わったところもありますので、これはやがて修正しなくてはいけないと思いますけれども、きょう書かせていただいたのは、あくまで当初の一番大もとのこの制度ができた時点での目的や内容を書かせていただきましたので、そういう視点でござんいただければと思っております。

○葉養委員長 どうぞ。

○安藤委員 たまたま私は武蔵野市の社会教育委員の会議にも出ておりますので、この①のアイウエの部分ほとんど社会教育委員の会議とかぶっております、それでオの部分で私は「開かれた学校づくり協議会」のほうに出ているものですから、ちょっと私なりの考えをお話し申し上げたいと思うんですけども、その前に、前回のこの会議が終わりました後に、最後の自分が所属しております「開かれた学校づくり協議会」というものが行われました。そのときに今までと随分違ったなということがいっぱいありまして、その辺のことをお話しておかなければと思ったんです。

実は1年前の今ごろは、「開かれた学校づくり協議会」は何だか全然機能していないなと思っていました。それは、アンケートをいただいても、それを答える人間がすごく少なかったりとか、多分それは答えられなかったんです。何回も学校に行っていない

と答えられないような質問だったりしたということもあったと思うんですけども、この1年間で恐らくメンバーの方たちがこれではいけないと思われたと思うんです。今回、最後にアンケートの集計までいただいたんですけども、ほとんどの方がアンケートをきちんと書いていて、そのためにこの1年間に何度も何度も学校に足を運んでいるということがわかりました。だから、随分委員の方たちのメンバーの意識向上があったんだなと思いました。それに対して、学校側のほうも、今までは、私たちが意見を言ったら、意見の言いっ放しみたいになって、この言った意見に対して一体学校側はどう思っているのかというのが全然戻ってきたことがなかったんですけども、私たちが書いたことに対して学校側からきめ細かい返事といたしますか、応答といたしますか、そういうのがもらえるようになってきました。ですから、この「開かれた学校づくり協議会」そのものを活性化して機能の向上を図らなければいけないなと思っていたんですけども、それはそれぞれの委員さんもみんな同じように思っていたようで、その辺の改善がすごく進んでいて、少しまいぐあいに動き始めたのかなと感じました。

それで、私はたまたま社会教育のほうでも、これは東京都なんですけれども、「新しい教育基本法の下で東京都が取り組むべき社会教育施策の在り方」というタイトルで、武蔵野市の社会教育委員の会議もどのようにしていかなければいけないのかという検討をいろいろ会議のほうでやっています、その中で注目しているのが、社会全体で教育力を高めていくには、地域教育というのが視点としてあるということをやっていたので、ちょうどここで合致したかなと思うんです。その中で、地域コーディネーターの存在というのがすごく注目されていました。私は、この「開かれた学校づくり協議会」のメンバーにこういうコーディネートすることができる人が入っていて、「開かれた学校づくり協議会」を活性化させる役割も果たしてもらいたいし、それから地域でこういうことができるからこういうことをやったらどうですかということも提案したいし、それから学校側でどういうボランティアさんとか、どういう指導者さんに来てもらいたいのかということ、反対に今度は地域に知らせて、こんなことができる人はいませんかとかと、そういうことをやっていけば、もっともっと「開かれた学校づくり協議会」が生かされていくのではないかなと思っています。

ですから、このイメージ図でいうと、学校評議員制度と学校支援地域本部がまいぐあいに融合していけばいいのかなというのが思いなんです。これは私の考え方なので、どうですかということなんですけれども、大学、特に武蔵野市はいろいろな意味で、5大学といいまして、生涯学習のほうなんですけれども、この辺の亜細亜、東京女子大、日本獣医生命科学大学、武蔵野大学、成蹊大学という5つの大学と連携していますので、

大学で、特に成蹊大学や亜細亜大学などは、社会教育委員の会議に先生方も入っていた
だいていることもあって、何らかの形でやっていきたいんだという思いがすごく強い大
学ですので、もちろん企業もあると思うんですけども、そういうところをもっともっ
と武蔵野市は活用したらいいんじゃないかなという思いもあります。

実際、そういう思いを持って中学校とかの開かれた学校づくり協議会に入っている教
授先生もおられるんですけども、「ただただ学校に行ってアンケートをとるだけで何
もできなくて」と言っただけでなさいなさいしている先生もいらっしゃるんで、もっともっと
そういう先生方を活用することをやる。それはどうしたらそうなるかということ、校長先
生の決断じゃないかなと思います。秋に教育フォーラムというのを教育委員会で
実施したときに、自動車学校で交通安全教室をやったという事例があったんです。とて
もいいことなので、私の所属する学校でもやればいいのになと思うんですけども、
「いやあ、時間数が足りない」とか、「行くためには交通費がかかってしまう」とか、
「いろいろそういうことを考えると、なかなか手が出せなくて」ということになってし
まうんです。ですから、校長先生が動いてくれなければ、幾ら地域が一生懸命、どうで
すか、ああですかと言っても話が進んでいかないというのもあるので、校長先生の動け
る環境づくりと意識改革もお願いしたいと思います。

例えば自動車学校の交通安全教室がとていいものであれば、教育委員会のほうでそ
れを予算化するなり、全市の小学校で実施するようにするなりとか、そういう動きもあ
ってくれれば、それがわかると多分校長先生たちもすんなり動けると思うので、その辺
のところも、もう一つは「開かれた学校づくり」のメンバーのそれぞれの学校での点検
なんです。それぞれの学校にいる「開かれた学校づくり」のメンバーの方たちの連絡会
みたいなものがあれば、「あそこでやったこういう会はとてもよかったから、あなたの
ところもどうですか」みたいな感じで、ネットワークになってつながっていきけることも
あって、それでそれぞれの学校の校長先生にお知らせすることもできるし、教育委員会
のほうにもお知らせすることができて、いいものは、では取り上げていきましょうとい
うことになっていくこともできるかなと、ちょっと夢みみたいなことかもしれないん
ですけども、そんなことも考えております。

以上です。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

非常に重要な指摘をいただきまして、この領域というのは各地でいろいろな展開があ
るんですね。国も、中教審で今初等中等教育分科会の作業部会というのがありまして、
月曜日に会合があって、27日に一応取りまとめで一段落するんですけども、その一つ

のテーマが、コミュニティ・スクールの問題なんです。学校運営協議会設置校をコミュニティ・スクールと通称で呼んでいるんですけども、コミュニティ・スクールがあって、学校評議員制があって、学校評価の関係で学校評価委員会を学校関係者評価の機構として設けるといったガイドラインの記述があって、またさらに学校支援地域本部というのが予算化されている。いろいろなものが国のレベルで動き始めてしまっているんです。それで、その間の関係性というか、そもそも学校と地域というのは、基本的にどういう理念で、大げさに言えばどういう哲学で関係を結ぶべきかという、そここのところの整備をしていこうということで作業部会が設置されて、ようやく3月27日に取りまとめという話です。だから、そういうあたりの国の取りまとめがどうなっているかというのは、3月27日に全部終わりますので、4月になれば多分わかっているはずですので、そういうこともちょっとにらみながらこの問題は検討したほうがいいかなと思うんです。

ただ、教育基本法の改正で13条というのが出てきて、新しく挿入された条項ですけども、学校・家庭・地域の連携協力をうたっているんです。あれは新しく挿入された条文でありまして、それと恐らくこの武蔵野市の視点①・②というあたりは結びついているのではないかなと思うんです。だから、法律上は、いろいろ難しい点はあるんですけども、方向だけはこういう方向で前に進まざるを得ないような状況だろうと思うんです。各論として今、安藤さんのほうからコーディネーターの問題が出されました。あと、安藤さんのお話を伺いながら、学校支援地域本部の話とえらくダブっているなという感じもしたんですけども、武蔵野市教育委員会は今そういうものというのはどういう方針でおられるのですか。学校支援地域本部みたいなものをどうするかということについて、指導課などはどのように考えていますか。

○吉原統括指導主事 市としては、この地域コーディネーターを設置してとか、あるいは学校支援地域本部そのものの導入等については、まだまだ検討段階でございますので、まだそういった議論は固まっていません。

○葉養委員長 ほかの方はいかがでしょうか。どうぞ。

○小山田委員 コミュニティ・スクールである日野市の平山小に昨年度、私4回ほどかわりました。そこでは、これからの社会をたくましく生きる力の育成や、豊かなかわり合いができる子どもの育成を目指して教育活動に取り組んでいました。育てる子ども像を明確にしておいて、そして、だれからもどこからもまず見えて、学校も地域もお互いに本音が言えて、みんなが子どものために動けるといった主題を持って学校運営協議会を持っていました。さっき安藤さんが言われたこととほとんど重なっています。学校評議員制度と地域本部を一体化して、17人ぐらいのメンバーで構成されていて、そのコ

一ディネーターは地域の人であり、小学校の教員出身であり、行政の指導主事をやり、最後は学校長をやって、広い視野から動けるような人でありました。その会には7つぐらゐの支援ボランティアの委員会があつて、その内容は放課後のたまり場、クラブ活動支援、読み聞かせ、夏休みの補習、農業体験、いろいろな内容で構成されていゐました。もう一つの柱として学校評価、あと家庭と地域と学校でのルールブックづくりの委員会がありました。そこでは、基本的な生活習慣について、学校・家庭・地域で共通のものをつくつて、みんなで子どもの成長を見守つていこうというものでした。あとコミュニティ通信の委員会があり、今やつてゐる運営協議会の通信を学校と委員さんで一緒につくるんです。だから、結構おもしろい通信です。地域には通信について詳しい方もいゐるんですね。いろいろなところに勤めていて、それは私に任せておいてくださいとか、ルールブックにも非常におもしろいイラストなどを入れる方も活躍してゐました。今回の発表では、支援者参画型の授業の創造ということで、全部の公開授業に支援者が入つて先生と協力してやつておりました。武蔵野などでできるとしたら、今やつてゐる左側の図に近いものに地域本部的なものいいところをうまく加味していけば、地域がしっかりしてゐますし、特に選択制などをやつてゐないので、学校が中心になつて地域と共に育てる子ども像をはっきりさせれば、その方向でやつていけるということを目の当たりにしてきゐましたので、何かそういう情報などが必要な場合は、私が橋渡しをやりますので、どうぞ使つてください。

以上です。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

安藤さんのほうから、大学がたくさんあるので、大学との連携をもう少し強めていつたらというご指摘がありましたけれども、今は結構大学が絡んでゐるんです。千葉県野田市で学校支援地域本部を設置してありまして、教育委員会の事業ですけれども、あそこは東京理科大があるものですから、結構理科教育の授業に入り込んでゐるんです、理科大の教授が地域人材として。この前、今週の月曜と火曜日に岡山市に行つてきたんです。岡山の岡輝中学校という生徒指導困難校がありまして、その筋では有名なんですけれども、コミュニティ・スクールになつてゐます。岡輝中学校の通学区域の中に保育所と幼稚園と小学校2校、6校園が入つてゐまして、6校園で1つの学校協議会を設置してゐるんです。それはコミュニティ・スクールになる前からです。地域の発想でもつて、6校園共通の課題だから、結局通学区域の中に6校園が全部入つてゐるものだから、そして生徒指導困難校ですから、警察などと連携しながらやらなければいけません。それで、校長先生を前から知つてゐるものですから、そこにちょっと視察に行つてきたんで

す。あそこも岡山大学がありますので、岡山大学の特別支援の専門の教授に入り込んでもらって、特別支援の指導法とかをかなり入れているんです。しょっちゅう見えるみたいなんです。だから、武蔵野市のそれぞれの学校の、この学校にはこういう課題があるというのが明確になれば、それに適した大学が、ここは5大学もあるわけですし、武蔵小金井まで手を伸ばせば学大だってありますから、何かできるんじゃないかなという感じがします。

ほかの方はいかがでしょうか。大学の可能性、企業よりも大学のほうがありますね。企業といってもいろいろな企業がありますけれども。

- 安藤委員 実は武蔵野市も、ただこれは放課後プランのほうに入るのでしょうか。土曜日の土曜学校のほうには随分たくさん、恐らく5大学全部の学校の先生たちに入っただいて、いろいろなカリキュラムができています。成蹊大学などはロボットづくりをやったりとか、亜細亜大学は、松澤先生が詳しいと思うんですけども、経済教育をやっていただいたりとか、武蔵野大学などは美術関係のほうです。土曜学校のほうではそういう子ども向けのもをやっていただいていると思いますので、そういうノウハウを、あと学校教育のほうにいいものは入れていきということまでいけばいいのかなとは思いますが、松澤先生も社会教育委員でいらっしゃいましたので、何か思うところがもしおありでしたら。
- 松澤委員 土曜学校とか、そういうのは割と単発でやりやすいんです。武蔵野は、大学にしてもいろいろな施設とか、文化施設とか、よそに比べればそういうものは恵まれているほうだと思うんですけども、では学校現場で教員が、こういうものが使えたらいいな、あるいは大学の先生にこういうところをお願いできたらいいなというときに、どうしたらいいのかということが余りわからない。だから、せっかく宝はいろいろあっても、ではそれをどのように学校に入れたらいいのか。その辺のところ、このように頼めばこう使えるということがもう少ししっかりできると、かなり現場でも入れやすくなるんじゃないかなと思います。
- 葉養委員長 いろいろなところでいろいろな工夫が動いていて、品川の第二延山小学校というのは、昭和大学の医学部のすぐ隣にある小学校なんですけれども、3メートルぐらいの道路を挟んで、向こう側が昭和大学医学部なんです。空き教室を使って、昭和大学医学部の小児科病棟に無償で貸し出しているんです。私はちょっと校長先生に連れられていったら、「おもしろいのがうちにありますよ」と言う。教室が普通の病室みたいになっているんです。その入り口のところに月曜から金曜日までの時間割があって、だれだれ医師が詰めているというのが普通の病院みたい書いてあるんです。小児科の主

任教授が2回は来るようになっていて、保健の授業をただでやってくれると言っていました。たまたま行ったときに、DV——ドメスティック・バイオレンスの関係でリストカット、6年生の女の子で手首を切った子がここに来ていたんです。お母さんも見えていました。ああいう症状になると、学校の教師ではちょっと難しいと。そういう意味でいうと、昭和大学小児科病棟の先生がここにいつも詰めていてくださって、病棟に貸し出しているものですから、看護師さんは必ずいるんです。だから、ああいう支援の仕方もあるのかなと。無償であるというのはなぜかという、結局小児科病棟に来る子どもというのは相当重度な子どもたちで、小児科の医師にとってみると、病棟に来る前の子どもの状態がわかるというメリットがあるということで、「いつの時期からかはわからないけれども、私が校長としてこの学校へ来る大分前からもうこういうのがあったんですよ」とおっしゃっていたんです。だから、いろいろなつながり方があることはあるんです。松澤先生がおっしゃったように、結局はつながり方の問題なんです。

野田市でも3年ぐらい前からちょっと私が入り込んでやっているものですから、結局コーディネーター組織をもう少しネットワーク化して行って、プラットフォームみたいな拠点を組織的につくる方向に持っていこうと。だから、ただコーディネーターといっても、何かコーディネーターのたまり場みたいな拠点づくりまで進んでいかないと安定しないだろうと。お金の問題も出てくるんです、現実問題として。ファンドづくりというんですけれども、このファンドづくりにもいろいろなノウハウがあって、この前、岡輝中学に行ったときには、「ちくたく」という広報誌をつくっているんですけれども、その「ちくたく」という広報紙の下のほうに欄があって、企業向けの広告欄があるんです。広告欄に広告を載せてくれる企業さんから1口幾らということでお金をいただいて、そういうのは結構あるんです。足立区の五反野小学校とか、ベネッセの元社長室長の三原さんが校長をやっておられた学校ですが、あそこも広報紙の下のほうに広告欄を設けて、1口200円とかと言っていました、おそば屋さんとか商店街からお金をいただいている。20万円ぐらい集まっていると言っていたかな。「口座はどうしているんですか」と言ったら、「たんす預金だ」と。口座をどうするかという問題はあるんですけれども、浄財を少し活動のために集めようと思えば集まるんです。ただ、集めるとなれば、組織をつくって、会計さんもいて、監査の機能も果たすような仕組みづくりをやっていかないと、集めたお金ですから、お金というのはきちんとしなければいけない。だから、だんだんと東京都が言っているみたいなプラットフォームづくりにつながっていくんです、地域教育プラットフォームという。そういう段階で今、小平もやっているし、それから渋谷が有名ですね。渋谷ファンインという、NPOに類似した退職校長さんが始め

たネットワークがあそこにはできています。杉並は、NPOがかなり活動しているスクールアドバイスネットという、理事長が生重さんというPTAの会長をやっていたお母さんです。だから、少し教育委員会も絡まなければいけない。そういう組織的なものができていかないと、なかなか面的に拡大しないという感じがあるんです。

ほかの方々はどうでしょうか。市民の立場からして、そういう学校支援の仕組みづくりを考えていく方向性について、何かご意見はないでしょうか。どうぞ。

○田中委員 私も、「開かれた学校づくり協議会」に地域コーディネーター、学校支援ボランティアのこの部分をリンクさせていくということについては、きょう、ぜひその辺はお話したいと思って来ました。ですから、先ほど安藤さんがおっしゃったことは本当にそのとおりだろうと思っています。ただ、懸念するのは、学校がこういう形で支援が欲しいという部分と、周りの方たちがこういったことを活用したらいいのにと思っているところにまだまだ温度差があるし、ここで言っている学校支援ボランティアの中身ももっともっと整理していかなければいけないんだろうと思います。

ことし本校も、保護者の方たちから、ぜひ鯨の勉強をさせたい、朝日新聞がその後援をするから、それに応募してほしいという話が来ました。もう一つは、女の子の下着の着用の仕方、これは某下着メーカーが最近盛んにやり出してきて、それをぜひ受けさせてほしいという申し出がありました。そういった申し出があったときに、学校は、では自分たちの学年の指導計画のどこにそれが入れられるのか、そして本当にそれが効果的なのかどうか、そこまで見通して初めてイエスかノーかが出てくるわけです。ところが、それをぜひこういうことをとものすごい熱意でおっしゃる方は、善意でおっしゃってくださっているのだけれども、別にそこまで見通しておっしゃっているわけではない。ちょっと新聞か何かに載ると、すごくいいとか、感動的なことが書いてあると、ぜひうちの学校でも同じことを子どもに体験させたいというレベルだけではなかなか学校も受容できないという部分がありますので、その辺の歩み寄り、もうちょっと内容をお互いに詰め合うことが必要なんだろうと思います。学校は今までやっているのだけれども、もっと効果的になるというものと、学校だけでは残念ながらできないという、質的な問題と量的な問題、この2つの課題、ここをうまく整理していくと、学校側とそう思ってくださる方たちとの距離が縮んでくるんだろうと思っています。

本当にこの地域コーディネーターというのは今必要だろうと思っています。学校は、とにかく何か社会で起こるたびに、ネットで犯罪が起これば、学校で情報教育をもっとしっかりやれという話になります。高校生がカードをどんどん使うと、消費教育についてやらなければだめだという話になります。租税教育があったり、環境教育があった

り、情報教育があったり、福祉教育があったり、人権教育があったり、何とか教育というのはいくらもたくさんあるわけです。でも、学校は教科中心に動いている部分がたくさんあるわけです。確かにそれも必要なんだけど、物理的な決まった時間の中で本当にできるのかどうか。これはもっともっと時間をかけてお互いに議論しないと、不信感だけが残るような地域人材の活用の仕方であってはいけないと思いますので、円滑に学校と連携がとれるような仕組みづくりが今必要なだろうと、学校としては思っています。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

ほかにはいかがでしょうか。これはなかなか反対するという意見が出るような領域ではないんですけれども、ただ、現実には動かそうとすると、いいことはわかっているけれども、では現実にはどうするんだというあたりの知恵の問題ですね。それはデスクワークで考えていても結局がちが明かないから、動かすのが必要だという考え方もあると思うんです。歩きながら考えるアプローチのほうがベターなのかもしれない。しかし、歩きながらも本当にこれでいいのかなと思いつつ苦しんでいる地域はいっぱいあるんですけれども、この問題についてもう少しご意見をいただけないでしょうか。

○小島副委員長 今、田中委員がおっしゃったことが非常に重要だと思うんです。学校というのは、要するに限定された目標を指導内容に沿って子どもに保障していくという、それがもう第一です。それに対して、地域が、あるいは大学が、企業が協力、援助するという仕組みにしないと、今、田中委員がおっしゃったように、私も校長の経験がありますが、学校が主体的に組んだカリキュラムの中に効果的に組み込まれて機能していくように考えていかないと、非常に盛んなんだけど、何かちょっと的が外れているなという学校になってしまう。そういう学校はいっぱいあるんです。一生懸命やっているんですけれども。特に義務教育ですから、小学校・中学校の基本的な部分が、きちんと教育が保障されるような、そういうところに結集していくということを考えないと、広がり過ぎてしまって困るような面が出てくるのではないかと思うんです。ですから、「地域と協働した学校づくり」とは何でしょうか。多分これは、主体的な学校をつくることそのものではないでしょうか。

○葉養委員長 学校のボーダーが少しあいまい化しているというか、あいまい化させようという。だから、ボーダーがきちんとかたい線で決まっているわけではなくて、少しぼやかして行って、グレーゾーンみたいなものを設けて行って、ただそこを先生方の領分だとしてしまうと、これは教育課程を編成して、それに基づいて活動をやるのが教師の使命ですから、そういう意味でいうと、グレーゾーンというのは、ではだれが担当する

かと。恐らく先生というわけにはなかなかいかない。ただ、では勝手に地域の人があてんでんばらばらにやればいいのかということになっていくと、しかし学校のすぐ外側にボーダーがあって、そこで活動が展開されている以上、学校のカリキュラムあるいは学校全体の教育計画とのある種の整合性というか、調和がないと、それはまずいだらう。だから、その辺の、だれが担当するのかとか、学校の安全性、子どもたちの安全性みたいなものも確保しないとイケないし、どういう仕組みでそれを進めていったらいいかというあたりが悩ましい問題である。というのは、この問題ばかり、東京都の生涯学習審議会で4年ぐらいやったんですかね。私は副会長をやっていたんですが、そこで学校と地域の連携の問題、学校と社会教育の連携の問題ばかりやっていたんです。それでプラットフォーム構想というのを出していったんです。小委員会をつくって、副会長が小委員長になりますので、プラットフォーム構想というのをその小委員会の中で詰めていったんです。

そのときにモデルにしたのが渋谷ファンインの活動なんです。渋谷ファンインというのは、NPOみたいな組織ですけれども、相川良子さんという原宿中の校長を退職された女性の方が、校長を退職したことを機に、校長在職中に常日ごろ思っていた課題が強烈なものとしてあって、というのは、原宿ですから、学校という言葉を聞いただけで嫌悪感を抱く子どもたちもいるというわけです。それで学校に寄りつこうとしないという子もいる。ではこの子たちは学校に寄りつかないで、一体どこに自分たちの居場所を持っているんだらうと校長のときに常日ごろ考えていたというんです。それで、校長を定年退職した後に、校長をやっていたときに知り合ったお母さん方に、そういう子どもたちの居場所づくりの活動を始めないかと言ったら、あつという間に50人ぐらい集まったと言っていました。それが母体になって、渋谷区全域に中学校区単位に支部をつくったネットワークができたんです。それを渋谷ファンインという。ファンインとは何かというと、中国語で歓迎という意味なんだそうです。歓迎という名称を持つ、ファンインという、今はものすごく大きくなっていますけれども、そういう組織をつくって、いろいろな活動をしています。インターネットで引けばすぐワーッと出てきますから、ごらんになるとすぐわかりますけれども、「渋谷ファンイン」で引けば、ものすごい情報量が出てきます。例えば、中学校の校長でしたから、中学校支援ということで言えば、スクール・カウンセラー配置事業です。文部科学省からの国からの予算だと、8時間分ですか、手当てされるんです。そうすると、4時間、4時間ということになって、2日間しか来られないわけです。けれども、とても2日間では手に負えないという実態をいたく感じていて、臨床心理学の学生さんでいいから、人材バンクをつくって、そこに登録

してもらって、登録して下さった方を学校のニーズに合わせて振り向ける事業をファンインのほうでやり始めたということです。

だから、そういう試みは結構あるんです。ただ、田中校長先生とか小島先生がおっしゃったように、ずれるんです。やってもいいという人はたくさんいて、人材もたくさんいるんです。素晴らしい人がいる。ただ、そういう人はものすごく熱意を持っているし、本当に無償でもいいから子どもたちのためにと考えてくださっているんだけど、それはありがたいんだけど、学校は学校として一つのプログラムの中で動いています。そうすると、例えば英語の授業を中学でやっているときに、地域には、恐らく武蔵野などには、国際線のパイロットの方で英語がぺらぺらの方は多分いるんじゃないかと思うんです。そういう方は、勤務体制としては週3日間ぐらい出ればいいんですか。だから、意外と平日におられる。杉並区の話だと、そういう方が「私がお役に立てるのだったら手伝いますよ」ということで人材バンクに登録している。ただ、難しいのは、英語は英語で単元学習という形で進んでいきますから、その単元にちょうど合ったところにその方をうまく入れられるかどうかという、だからコーディネート問題なんです。それをどういう形で、この武蔵野の地域性みたいなものを踏まえたときにつくれるのか。その場合に、こういう「開かれた学校づくり協議会」の今の形でいけるのか、少し模様がえしたほうがいいのかとか、その辺、ご意見をいただけるといいと思うんですけれども、何か知恵みたいなものはないでしょうか。

○安藤委員 コーディネーターの方の資質というのがすごく問われると思うんです。先ほどおっしゃったように、学校側が困るような提案をしたのでは意味がないわけであって、ですから、もちろんコーディネーターはすごく勉強も必要だと思うし、いろいろな地域との情報をもらったり上げたり、連携も必要だと思うんですけれども、例えば私が今思ったのは、学校の授業の中には入れられないけれども、武蔵野市の場合は、あそべえも予算を持っており、それから土曜学校も予算を持っており、さっきのような内容は、あそべえの予算を持っているところでちょっと単発でもやったらすごくいいんじゃないかなとかいうのを私はちょっと感じたんです。ですから、武蔵野市の仕組みもよくわかっていることも必要だと思うし、もちろん学校側が必要としていること。ただ、これは私、教育長様からお伺いしたあれなので、社会が必要としていて、学校に取り入れてほしいということもあるわけで、それは「開かれた学校づくり協議会」の側からも提案していきたいし、その辺のことは校長先生方にもわかっていただきたいという思いがあるし、ですからコーディネーターとしての資質をきちんと持った人間がコーディネートし、なおかつ多くのメンバーでその内容について協議しながら提案していけるシステムという

か、仕組みができればいいのではないか。それを私が先ほどちょっと申し上げたのが、「開かれた学校づくり協議会」でそれぞれの学校にいるメンバーの方たちがどこかで連絡会を開いて協議していくという形を持っていく。「こういうことをしたいんだけど」と言ったときに、ほかのメンバーが、「おやおや、それはちょっと学校教育には入れないんじゃないの」とか、そういうことをお互いにアドバイスし合えるような場というものがあればいいのではないかなと思います。

○葉養委員長 ほかの方はいかがでしょうか。はい、どうぞ。

○磯川委員 この「開かれた学校づくり協議会」というのは、確認ですけれども、今、武蔵野市の小学校なり中学校すべてに設置されているんですね。

○吉原統括指導主事 そうです。

○磯川委員 その委員さんは教育委員会が任命しているんですね、委嘱しているんですね。

○吉原統括指導主事 そうです。

○磯川委員 だから、公の委員さんですね。その方たちの権限と責任という部分は、要するに個人としての意見を学校に対して提案する、提言するということに尽きるんですね。

○吉原統括指導主事 そうでございます。

○磯川委員 会議に出られたときに、それが有償という形で会議に出られているんですか。

○吉原統括指導主事 いわゆる報酬、謝礼はないです。

○磯川委員 それはなしですか。

○吉原統括指導主事 はい。

○磯川委員 ではボランティアですね。

○吉原統括指導主事 そうです。

○磯川委員 その学校ごとに、それは協議会のメンバーというのは、地域のメンバーさんというのは大体何人ぐらいいらっしゃるんですか。

○吉原統括指導主事 大体8名です。

○磯川委員 各校、決まっているんですね、その8人というのは。

○松澤委員 絶対8人でもなかったですね。大体8人程度という枠があって……。

○吉原統括指導主事 8名程度です。

○磯川委員 だから、協議会として何かを決めるということはないんですか。

○吉原統括指導主事 ないです。

○葉養委員長 ボランティアなどでも、ほかの地域だとよくあれになるんですけれども、西洋のほうからボランティアという概念は出てきて、宗教的な意味合いが強いんです、もともとボランティアという概念には。ただ、日本ではキリスト教があるわけではない

し、ボランティアというのを入れ込むときに、ヨーロッパだと宗教の上に乗っているから無償が当然だということになるんだけど、日本はキリスト教の土台の上にボランティアというものを入れるのではないものだから、せめて交通費程度とか、何かファンダが欲しいという話はすぐ出てくるんです。ただ、それも習志野市の秋津小学校という有名な学社融合の学校がありますが、あそこの秋津コミュニティを引っ張ってきた岸裕司さんなどは、お金の話になったら、2,000円やれば「何だ、2,000円か」という話になって3,000円になる。3,000円やれば「何だ、3,000円か」と話になって、結局天井知らずになっていく。だからただがいいんだというのが岸さんの言い分なんです。ただ、杉並のスクールアドバイスネットというNPOがありますけれども、その理事長の生重さんとか伴野さんという家庭の主婦で活動している人の話を聞くと、「せめてお茶菓子代程度でいいから、少し欲しいのよね」という話も出たりするんです。そういうことであれば、それこそ広報紙の一部に広告欄を設けて、浄財をおそば屋さんとか地場産業から募るということをやれば集まらないことはないんです。それとあとは、結構いろいろな地域で、コミュニティ通貨みたいな地域通貨制度をまちづくりと絡めてやっています。社会教育分野で、多分武蔵野はやっているんじゃないかと思うんですけれども、ある講座に出たときは判を押すとか、判を10個押したからどうということはないんですけども、押す欄を設けておいて、参加しがいいとか、住民の参加に対する動機づけに貢献するような、そういうものを持っている自治体はありますね、社会教育講座などで。だから、あれを少し観点を変えてやれば、10個あるいは20個その判が埋まったら、例えば理髪店に行ったら洗髪がただになるとか、地域通貨の発想というのはそういうものです。そのかわりネットワークを組んで、商店街のネットワークに入り込んでもらって、地域通貨を使えるような仕組みづくりをしなければいけないんですけども、それをボランティア制度と絡めていって、現金を集めるかわりに、そういう厚意のネットワークみたいなものを土台にして活動を進めたりとか、何かいろいろなことをやっているんです、結構いろいろな地域で。けれども、武蔵野という地域性とか、風土とか、ここの土台にどの程度可能性があるかというのは私はわからないので、そういう点をちょっと市民の方とかに、こういうことであれば武蔵野でも動くんじゃないかといったものがあれば、ちょっと教えていただけるとありがたいなと思います。

○安藤委員 武蔵野はむしろお金は余り出さないほうがいいような気がするんですけども、磯川さんはどうですか。やっぱり交通費ぐらいは欲しいと……。

○磯川委員 いやいや、私は、今の「開かれた学校づくり協議会」という組織は、私もよくその経緯を存じ上げないので、いいかげんなことは言えないんですけども、ボラン

ティアの延長線上の成り立ちだろうなという気がしているんです。それで、逆にこれを意地悪な見方をすると、「開かれた学校づくり協議会」は、学校にとってアリバイづくりの一つになるのかなというふうに見えるんです。だから、さっきの議論にもありましたけれども、要するに学校というのは本来何を教育するのかと、要するに限定された中での教育であって、その中に、では地域とのかかわり方の中で何か地域がお手伝いできる部分があるかというところをもうちょっと詰めないで、言ってみれば、世話好きのおばさんたちには勝手なことをとりあえずは言わせておかないといけないみたいなことになりはしないかという気がしますね。だから、私は、事務局の方にはまことに申しわけないんですけれども、地域と学校との関係という部分に視点を持っていきたいということでの考え方はわかるんですけれども、本来、武蔵野の教育は武蔵野の学校は何を目指すのか、そのために地域とどうやって連携していくのかという発想は正しいんだろうと思うんです。あくまで地域と学校との関係というのは、学校の教育力を高めるために地域を上手に使うということに使われるべきだろうという気がします。要するに、学校単体では持ち得ない力を地域に求めるということであれば、その地域から学校が求めることに対して、ボランティアである必要は僕はないと思うんです。有償であるべきだと思います、そういうサービスをする人あるいは団体に対して。もちろん、そんなにべらぼうに高いものは使えないでしょうけれども。だから、逆に言えば、それだけの価値があるサービスを地域から受けられるのであれば、学校は堂々とそれに対してお金を払えばいいし、そのお金はあくまでコミュニティが予算として認める、認めないという中でやっていけばいいのではないかなという気はします。そうでないと、地域から受けられるサービスがよくなると思うというか、進化しないんじゃないかという気がします。

だから、逆に言うと、私はもっと現場にかかわっておられる先生方の意見として、要するに、今の小学校なり中学校の公立の教育の中で、こういう部分にもっと手をかりたいんだといった意見もお聞きしたいという気がいたします。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

視点3が結局ベースなんです、きっと。「本市の特性を生かした質の高い信頼される学校づくり」にかかわる主な意見というのが資料5にありますけれども、公立学校というのは大体何をやる場所かとか、そういうものが恐らくベースになって、学校と地域の協働関係の問題とか、視点2の「信頼される学校づくり—自律的な学校経営の推進—」、この辺が出てくるんだろうと思うんです。皆さんは「信頼される学校づくり」というのをどのようにイメージされますか。例えば、私学への流出とか、現実問題としてそれはあると思うんです。けれども、信頼しているのだったら何で流出してしまうのか

とか、流出するということと公立への信頼とは別物だということなのか、どこか関係があるのか。恐らくこの辺から学芸大附属へ行っている子もいると思うんです。それが悪いというわけではないんですけれども、武蔵野市立学校の信頼の中身とは何か、それを詰めるということが今、磯川さんがおっしゃったような問いかけに答えることになる。これは校長先生にも求められる。校長先生は、何が一体自分の学校に欠けている要素で……。

○磯川委員 例えば、私は思っているんですけれども、少人数教育などをやっていますね。そうすると、これは私の友人にたまたま中学の先生をやっている者がいまして、たまたま彼と電話で話していたら、少人数教育をやることは子どもたちにとって非常にいいことなんだけれども、結果としてはそれは教員に対してはかなりの負担を強いていることになっているんだと言うんです。要するに、3クラスをわざわざ4クラスにして、少人数の授業をやる。ということは、4人の先生が要るわけです。もともとの3クラスだとしたら3人の先生しかいないはずですから、4人要るということは、もし仮に、例えばその4人がたまたま用意されて勤めることになっていたとしても、1人が風邪を引いて休んでしまったとなったら、そのやりくりが大変なことになってしまうといったことも聞くんです。そうすると、教員の数というのは、今の例えば武蔵野の場合でも、足りていると思っているのか、もっと教員の数があつたらもっといい教育ができるんだと学校側が思われているのどうか。もしそうだとしたら、その部分を地域に求めたらどうですか。例えば、地域が用意できるそういう部分だったら、こんな形があるんじゃないかみたいな提案が地域から出てくるんじゃないかという気がするんですが。

○小島副委員長 少人数は、今おっしゃったように、無理してやっているんじゃないんです。それは、例えば数学で少人数指導をやっている学校は、数学の先生が1人プラスされている。その先生を含めて2学級を3学級にする。そういう形でやっていますから。それから先生が休んで授業が進めにくい状況は、少人数に限らず起こります。

○磯川委員 そうですか。無理してやっているわけではないわけですね。

○小島副委員長 すべての教科でやっているわけではないんです。だから、もしそれを全部の教科でやるとしたら、相当な人数を入れないといけないですね。例えば、私は都の教育委員会にいたことがあるんですけれども、その当時33人学級をつくるとしたらどれぐらいの教員が必要かと。実際には総学級数の中の20%なんです。それでも4,000人必要なんです。それで、これはもう、いかに東京都といえども4,000人ふやすのは無理だなということで、少人数で学校に1人ずつ配置して、学校でそれを有効に使ってもらおうということになりました。だから、そのレベルのことを地域に要求するというのはち

よっと無理かもしれないですね。

- 磯川委員 例えば、今の理科の専任をつけようとしていますね。ああいう制度であっても、その部分を、例えば今の小学校・中学校の先生方にはないから、そこに求めようとしているわけでしょう。要するに、そういう特殊なスキルを持った人たちの助けをかりようという形でああいう、どういう身分になっているのかわかりませんが、武蔵野はやっていますよね。だから、その辺……。
- 田中委員 入れてもらっていますけれども、そういう指導能力や指導技術を今の教員が持っていないから入れるのではなくて、よりよい授業をするためには、理科の場合、準備だとか片づけだとかが入りますので、そういった部分をサポートしてもらおう。教員は教員としてきちんと45分の授業を、もしくは理科ですから大概2時間続きでやりますけれども、90分はしっかりやろうと。そのための準備のためのサポートとして入ってきているというのが、うちの支援員です。
- 磯川委員 そうだとしてもいいんですけれども、例えばそれに求められているような、現状の学校のスタッフ以外に求める部分というのをやっておられるわけじゃないですか。それと同じようなことが要するに地域に対しても求められるのではないかという気がしますということです。例えば、武蔵野の教育の特徴という部分で、言語力の充実というのを昔から言っておられると思うんです。言語力の充実という部分に関して、では今の学校教育というのは十分な言語力の教育をやっておられるのかという部分一つをとってみても、その部分を手助けしてもらうために、学校外に何かそういう力をもらうという選択はあると思うんです。それは、その受け手がNPOなのか何なのかは知りません。大学でもいいでしょうし。だから、何を学校の教育の中で求めて、その部分に関して地域に求めるかということに、そこからしか地域との関係というのは出てこないんじゃないかという気がしますけれども。
- 安藤委員 私は、「信頼される学校づくり」の「信頼」というのは、その学校にどれだけの教育力があるかだと思っているんですけれども、その中で武蔵野市の特性というのは、地域の中に文化人がすごく多いということも一つ特性だと思うんです。例えば、これから英語教育が小学校でも始まっていったときに、保護者の中あるいは地域の中にそれをサポートする人材というのはたくさんいると思うんです。だから……。
- 磯川委員 ただ、それをそのままでは使えないと思う。文化人であろうが、一般のサラリーマンの延長線上にあるような人たちだって、そのまま学校にその人材を持っていったって困ってしまう、学校の側では。
- 安藤委員 それを、前にちょっと見てきた学校では、一手間かけてやっていました。そ

れは、学校の先生と、それから地域の方とでできる内容を話し合っていました。できるか、できないか、やっていたし、あとそれから、武蔵野市には国際交流協会というところがありますから、そういうところから呼んできて、地域の方々も交ざってといったことをやっていたので、恐らくそのままではできないと思いますし、一手間も二手間もかけなければいけないと思うんですけれども、できないことではないと私は思っています。ですから、武蔵野市の特性ということで、人材は豊富にある。それをどのように使っていくかという言い方はとても失礼なんですけれども、組み入れていくかというところにコーディネーターの能力もかかわってくるだろうし……。

○磯川委員 そのコーディネーターというのも私はもう一つびんときていないんですけれども、コーディネーターというのはどういう立場の人なんですか。

○安藤委員 立場といたら……。

○磯川委員 どういう権限と責任を持った人なんですか。

○松澤委員 単純に例えば中学校ですごくニーズが多いのは、部活の指導とか、これは現に教員も足りない、指導者がいない。これはすごくあって、今までも武蔵野市もいろいろ大学にお願いしたりとか、いろいろやってはいるんです。それでもなかなかうまくいかない部分があるんですけれども、そういう割と頼んで、人がいればずっと入りやすい部分と、それから、授業の中になると、例えば英語あるいは国語の中にこういうものを入れればより充実するだろうなという部分は当然ありつつも、先ほどの話に戻る部分があるんですけども、全体の計画の中でどれだけそれをやっていけるかということと、それから今の教員がものすごく忙しくて、そういう新しい試みをするためには相当事前の話し合い、それから検討の時間をとっていかなければいけない。ところが、今はそれがなかなかとれない。となると、教員からすれば、とりあえずまず自分でやったほうがある程度までできるのなら、このほうがいいみたいになってしまう部分もあるんです。だから、本当にものすごくニーズがあってならやるだろうし、また全体の話し合いの中で、ぜひここをという強力なそれがないと、こうやったほうがいいだろうなということはいろいろあっても、現実にはそれを取り入れていくというのは、特に今の学校の忙しさの中ではかなり難しい部分があって、そこが私も、ではどうしたらいいかと簡単に言えないし、学校の今の忙しさというか、教員は何もしないでいいかということ、それは当然違うし、地域に入れられる力を入れなければいけないんですけども、そこにまだ解決しなければいけない問題があるということですね。

○磯川委員 今忙しいと松澤委員はおっしゃられましたね。そうなんでしょうね、多分。何でなんですか。

- 松澤委員 昔よりすごくいろいろな事務量がふえたと思います。
- 磯川委員 それは、管理的な要素ですか。
- 田中委員 管理的もそうですし、子どものこともそうです。
- 磯川委員 問題が非常に難しくなったりすると。昔ならほったのの一つもたたいておけばよかったものを、そうはいかなくなっただということですか。(笑)
- 田中委員 殴らなくても、親がちゃんとやってくれましたから。
- 松澤委員 デスクワークもふえていると思うし、昔のほうがとにかく教員が子どもと接している時間が結構ありました。
- 磯川委員 私は今、松澤さんがおっしゃられた部活のお手伝いというか、部活をどのように使うかという部分で地域の力を使うというのは、これは一つのいいアイデアだと思います。
- 小山田委員 平山小では、3年目ぐらいになってだんだん見えてきたんですが、最初は支援者をお呼びして授業をやると、支援者も「言い足りなくて、途中で切られてしまった」と、先生は先生で「支援者の方が話し過ぎて、とても授業が進まない」と、そういうやりとりがあったんですが、取り組み後の反省をして、継続して積み上げてくることによって、「あのことね。」と今はお互いにわかるようになってきてくれたとのことでした。だから、最初はきっと苦労があると思うんですけども……。
- 磯川委員 それは信頼関係ができてくるからですね。
- 小山田委員 そうです。それがお互いに、「きょうはそこを10分で、また後半に5分の出番をお願いします」ということで話がつくようになって、それでその人たちの実感というんでしょうか、こういう入り方で授業が成り立っていくんだということが見えていくのだそうです。だから、授業よりも、その前の段階と終わった段階を積み上げていくことによってだんだんと効率化されてきて、今は非常によく来たとのことでした。今、磯川委員が言われた、あそこは近郊農業的なことで農業が非常に盛んなので、農家のというときにはその方の出番というんでしょうか。1年生から6年生までその方がかわっているので、もう名前まで覚えてしまっているんです。あの学級は最近すごく子どもの動きがよくなったとか、そんなことまで見えてくるような積み上げ方がされていくと、さらにいい支援というんでしょうか、そういうことができてくるというのを間近で見ましたので、最初は苦労するけれども、お互いがわかってくると、お互いに言いたいことが言えて、授業も活発化してくる。子どもが非常に前向きで、目を輝かせてやっている様子も見ましたので、積み上げていけば何とかなるんじゃないかと思います。
- 葉養委員長 この「地域と協働した」というコンセプトの中に、例えば机間巡視に保護

者の方の手をかりて教室の中に入り込んでもらうとか、小学校だと、調布の小学校などでありましたが、保護者の方が立ってくださるだけで違うんです。ADHDの子かがいますから、そういう子が1人でもいると、あるいは保護者が1人いるだけでえらく助かる。あるいは人材として国際線のパイロットの方が英会話を教えてくださる。そういうスタイルの学校支援の形と、もう一つあるのは複合型です。例えば、杉並区の和田中が学校運営協議会主催で夜スペを始めたという、あれは学校教育の一部ではないという位置づけです。社会教育の一部を学校運営協議会が始めた。それに類する試みもあることはあるんです。先ほどちょっとお話しさせていただきました第二延山小もそうです。品川の第二延山小も、空いている教室が幾つかあるから、1つ無償で昭和大学医学部に貸し出している。昭和大学医学部は、自分たちの考え方でそこを病室にして、子どもたちあるいは子どものお母さんが来られるような状態にしている。岡山へ行ったときも、シニアスクールを組み込んでいるんです。シニアスクールというのは、高齢者の方の学習のスペースです。あれは岡輝中学の校長先生が発案されて、岡山市の教育委員会が、あれはいいということで、教育委員会が広げたと聞いています。だから、ああいう学校の施設・設備を借りてしまう形をとって、学校の機能以外のものを組み込んでしまうという形もあるんです。施設的な、学校施設の複合化というのはそういう発想なんです。千代田区のパークサイドプラザというのもそうですけれども、複合ビルをつくって、温水プールを設けたりとか、図書館を設けたりとか、最初から複合することを想定してキャンパスの中にビルをつくってしまうんです。それで、和泉小学校は、3階と4階だったか、間借りしているんです。だから、ああいう施設の複合というのはもう数十年の歴史があるんですけれども、機能の複合みたいなものが、和田中の夜スペとか、あるいは岡山の岡輝中学とか、シニアスクールの形とか、出てきているんです。だから、そういう面を、例えば部活動とかクラブ活動部分というのは、むしろ社会教育、社会体育にゆだねてしまって、そっちのほうで学校がかかわりなく活動を展開してもらって、ただ施設だけはちょっと提供するというので、複合型の学校と地域の協働の形というのもあると思うんです。

だから、幾つか整理していかないと、恐らく議論が混乱してしまう。もう少し後でいいと思うんですけれども、協働といってもいろいろな側面がありますので、いろいろな形もあるので、少し複合型というのが、和田中の夜スペを契機にしていろいろなところへ出てきているんです。塾が入り込んだケースもあります。夜スペも塾ですけれども、新聞報道などを見ると、たしか全国で20カ所ぐらい、塾が入り込んでいるケースがあるんです。だから、それを塾ということではなくて、例えば、心理的に不安定な子どもと

か、不登校ぎみの子どもとか、いじめの子ども、そういう子どもの拠点を、学校の中で空いているスペースがあれば、そこにセンターとして組み込んでしまって、ただそれはその学校の建物の中にあるけれども、運営とか人の派遣とかはそういうセクションの仕事にする。何かそういう複合型というのものもあるんじゃないかと思うんです。

そういうこととの関係で、資料4の満足度が低いところが、きっと公立学校の今後を考える場合に、満足度が低いところというのは、ある意味で私学流出とかを生んでいる土壌になっている面もあるのかもしれないし……。

- 磯川委員 これは満足度になっていきますけれども、逆に言ったら、期待というのが、そんな部分に期待していないんだということも言えませんか。
- 葉養委員長 なるほど。満たせないという。
- 磯川委員 そんなことをもともと公立の学校に求めているという声も入っていませんか。
- 葉養委員長 そうですね。受験に役立つ内容の学習指導を学校でやるのはどだい無理があるというさめた見方なのか、これは僻地などだと、もう私立も附属もありませんから、問題が違うんです。公立が頑張ってくれないとどうしようもないわけです。今、僻地校の調査に結構回っているものですから。でも、武蔵野は……。仮に武蔵野自体のデータというのはないんでしょうか。
- 吉原統括指導主事 今はないです。
- 小島副委員長 月曜日から金曜日までの時間割の枠の中のこと、これは学校が必要に応じて求めていく。それを積み上げていけば、できます。それから土曜日とか夏休み、これはどんどん広げてもらっても困らない部分で、そこは本当に自由にやる。私が前にいた学校では、教室には入れないんですけれども、音楽室とか体育館などには地域の人が、もちろん組織があってどんどん入れるんです。子どもも集めて、そしていろいろな活動をする。もちろん保険をかけてあるわけですが、それは校長が何も言わなくてもいい。それから、夜間にやるというが、これはもう学校は関知しない。そのようにすみ分けをしていかないと、あれもこれもということになると、大変になると思うんです。この視点というのがどのあたりか。学校教育というのはある程度限定して考えているんですか。それとも、もっと広く、際限なく考えているんですか。それによって大分変わってくると思うんです。

それで、先ほど磯川委員さんがおっしゃいましたけれども、この③の質の高い教育を充実させるというのが学校の目的なわけです。それ以外にないわけです。そのために一番大事なものは学校経営と教育活動です。それを支えるということで、地域と協働した

- というのがあるので、そのこのところの組み立てを間違えると、地域はものすごく活性化したけれども、学校はおろおろしているという状況になると困るような気がするんです。
- 葉養委員長 学校の施設で少し遊休化している部分というのは何%ぐらいあるんでしょうか。使っているんだけど、普通教室部分としてつくられていたものが、少し子どもの数の減少などで普通教室ではなくなっているという、それも使っているということでしょうけれども、今は満杯ではないですね。
- 松澤委員 昔はもっといっぱいどんどん出てくるんじゃないかと思っていたんですけども、少人数授業でこのようにやったり、いろいろなものに使っていると、なかなか意外とないんです。今、私は教育支援センターにいて、学校派遣の教育相談員が行っていますけれども、まだ教育相談室もとれないところが幾つかある。みんながイメージしているほど、学校であいているところがあるんじゃないんです。
- 葉養委員長 スペースがないとなると、何か複合といっても全面改築を機にとか、そういう話になってしまうんですけども、でも全面改築はいずれ起きるわけだから、新しい学校をつくるときにはこういう理念でつくってほしいとか、そういうのは、もしこの委員会である程度意見が出れば、要望として上せられるかもしれないんです。改築はいずれやってきますから、築30年ぐらいで大体全面改築しなければいけないような状況ですからね。それと、普通の教室の中に地域の方を人材として活用しながら入れ込むという、それしか今のところはない、そんな感じなんではいしょうか。事務局、いかがでしょう、その施設的な面というのは。
- 鈴木指導課長 実際には、あそべえとか、放課後の居場所が学校の中に入っていたりしていますので、基本的には、空いているというよりは、すでに活用されているわけです。だから、既にあそべえなどか入っていることが、そういう使われ方をしているということだと思います。新たにまた別のファクターがそこに入ってくるというのは、ちょっと今の中では難しい面があるのかもしれないと思います。
- 葉養委員長 地域人材をある学校に活用しようとする場合にポイントになるのは、うまくいっているケースというのは、どこかに地域の方々の事務室空間みたいな拠点があるんです。学校の中にそれがないと、先生方は忙しいものだから、授業が終わったときに、途切れたときに、たまたまぶらっと女の先生が、お母さんがいるからというので話に行ったときに、「私の授業は今こういう单元なのよね」などという話から、「ではそういう单元をこれから先やるのであれば、こういう人がいるわよ」といった話からコーディネートが進んでいくといったケースがあるんです、杉並などを見ていると。だから、学校の外側に拠点があったら、とても拠点にならないんです。もし地域人材活用というこ

とを考えるのであれば、学校の中にたまり場みたいな空間はないと動かないと思うんです。それは無理なんですか。そんなに広い空間である必要はないんだけど、何か地域の方が詰められる場所というのがないと、恐らく機能しないですね。教育委員会に取りまとめの窓口があるとしても、端末は各学校にないと、先生方がぶらっと接触できる場所がないと、動かないですよ、絶対に。「開かれた学校づくり協議会」というのは、これは事務室とか、何もありませんか。

○安藤委員 会議室……。

○葉養委員長 では、こういう部屋はないんですか。

○安藤委員 ないですね。

○葉養委員長 そういうのをつくるというだけでも相当違うんじゃないかなと思うんです。何か事務局、狭いスペースでいいんです。ちょっと間仕切りを入れて、3～4人が座れるような空間があるだけで相当違ってくるんですが、そういうのはどうですか。そういうのはなくてもいいですか、安藤さんなどは。

○安藤委員 P T A室があって、P T A室でいろいろな話が進んだというのはありましたから、多分そういうイメージなのかなと今伺っているんですけども、あればきっと違うでしょうね。でも、わざわざつくらなくても……。それはあればあったほうが、だれかとだれかが会って話をして盛り上がっていくというのはありますので、でもそれは別にわざわざ部屋をつくらなくても、学校の図書室でもいいような気もするし、教育支援室で教育支援の方と話をしてもいいような気もするし、ただあくまで1週間に1回ですよ、いらっしゃっているのが。そうですね。でも、拠点があるとないでは、もしかしたら差がすごくあって、話がというか、いろいろなことが進むのに大きいのかもしいですね。

○葉養委員長 印刷機材を置いたりとか、インターネットに接続するパソコンを置いてるところもあるんです。青森の八戸で学校支援地域本部モデル事業を進めている学校があって、そこに行ったら、どこかの大きなスペースの一角ですけども、固有のパソコンとか印刷機がもう用意してあって、女性の方でしたが、お母さんが詰めておられました。だから、何か、何もないと、場所がどこかあいているところを探してとなくなると、どうなんだろう。学校運営協議会を杉並区の杉森中学校などでやっていますが、あそこは区の教育委員会から1年間47万円来ますから、そういう印刷機などを購入できるようになっているから、置き場所が必要になってきて、部屋ではないけれども、置く場所はあります。拠点みたいに、大きな部屋の片隅を置き場所にしておく。空間があったから動くというものでもないけれども、何かあったほうが落ちつくということはない

のかとか……。

- 安藤委員 パソコンのことを言ったら、まずこっちよりも先生方にパソコンをとってしまいますけれども。(笑)
- 葉養委員長 全員に渡っていないんですね。1人1台になっていないんですね。
- 小山田委員 学校に支援者の方が出向いた時、「あそこがあいているからあっちを使って」とか、「図書室にはきょう子どもがいるよ」とかというんじゃなくて、そういう空間があって、では読み聞かせの練習を、私は不安だからうまい人に教えてもらおうとか、そこに行けば、そこだったらできるというように、あればあったで、それは活用は相当できると思います。支援に入る人たちが少し早目に来ていろいろな準備をすとか……。なかなか学校の中では、あいているときは使えても、「ちょっと今会議をやっています」とかということもあるので、そういうところがあるのだったら、活用したほうがいいかもしれないですね。
- 葉養委員長 大分時間が押してきたんですけども、この前の回では評価の問題がかなり出ていたんですけども、「信頼される学校づくり」との関係で学校評価というのは一つの大きなテーマで、それと今まで出ていたのが、今のところ武蔵野市は学校評議員制度ということなんですけれども、もう少し保護者・地域住民が学校運営に参画するところまで踏み込むのかどうかという問題もあるんです。法律上はできるようになったんですけども、教育委員会が指定すれば、その指定された学校については、保護者・地域住民が一定の法律上の権限を持って、学校理事会として機能できるような組織をつくれるようになったんです。ただ、そこまでいくかどうかは別として、「開かれた学校づくり協議会」というものがあって、それはそれで、これから先も10年ぐらい先までそのまま続けていけばいいという話なのか。法律の裏づけが出てきたのであれば、その一部を取り込んで、もう少し強化するということがどうなのかとか、その辺のことはどうでしょうか。学校評議員制度、学校運営協議会制度、学校支援地域本部というのが資料に載っていますけれども、学校支援地域本部との関係でコーディネーターとかそういう問題が今まで出てきていたんですけども、運営面とか一部管理面に保護者とか地域の方が関与するという仕組みについてはどのようにお考えになりますか。
- 安藤委員 私は怖くてできないです。学校のことは学校に任せたいです。もしそうなるとしたらすごく勉強しなければいけないと思うし、学校のことは学校にお任せしたいですね。それは突き放すのではなくて、それが自然だと考えるんです。今、「開かれた学校づくり協議会」のメンバーをイメージして、そこまでできる能力と言っていいのかどうかかわからないですけども、そこまでできるメンバーを集めるとなったら、それはそ

れでまたすごく大変だろうなと思います。とてもじゃないけれども、私は入れないなと思います。

○葉養委員長 これも運用を見ていると、かなり千差万別でして、岡山の岡輝中学校に行ったときも、あそこはコミュニティ・スクールになっているんです。6校園で法律上の学校運営協議会があるんです。けれども、清輝小学校という小学校に行って、3月で定年退職される岡校長にそのお話を伺っていたら、非常に素晴らしい校長なんですけれども、「皆さんからご意見は承りますけれども、最終的に決めるのは私です」と言うんです。だから、そこは法律上のこういう規定どおりにはやっていないんです。学校運営に関する基本方針について承認するというのがあるんだけれども、「ご意見は聞く。ご意見はどんどん出していただいて、それを受けとめることはする。ただ、校長としては、判断させていただく。それをどう判断するかというのは、私がやります」と、そういう運用の仕方をあそこはやっているんです。それで、どうも300校ぐらい全国に今あるんですけれども、文部科学省のほうで調査などをやっていますけれども、それを見ると、相当ばらついてます。特に人事権が問題になるんですけれども、人事権をきちんとやっているところというのは十何%しかないんです。だから、杉並区というのは、その十何%に多分入っているんだろうと思うんですけれども、非常にまれなケースですね。

○小島副委員長 私が体験した学校では、結局この人事権について、校長が気に入らないということで教育委員会に申し立てて、教育委員会がそれを尊重して校長をかえたという学校があります。その理由を聞いてみると、極めて専門家が、教育がわかっている人が聞いたら、とんでもない要求をしているなと思うんですけれども。だから、サッカーをやったことのない人間がサッカーの監督をしていないということと同じように、外から、違う視点から物を言う、意見を言う、建設的な意見を言うということはあっても、直接中に入って運営そのものを左右するというのは、私はちょっと冒険のような気がします、自分の体験からいっても。そういう学校というのは、教員が異動したがる、そこに行きたがるんです。だから、だんだん若い人ばかりになっていくんです。教育をするということによって生活が保障されているプロの教員・校長が学校をやっているわけですから、そこに何か足りない面があれば、それはもう率直に注文をつけていくという現行の制度で、もちろん現行の制度で今武蔵野がとっているもので極めてまずいという面があれば、それは取り上げて改善していかななくてはいけないと思うんですけれども、どんなものでしょうかね。

○葉養委員長 人事権の問題はよく出てくるんです。ただ、ちょっと一つだけ、岡輝中学校に行ったときに人事権というのは使いようだなと思ったのは、生徒指導困難地域で、

子どもの50%の家庭が生活保護世帯という地域なんです。課題が非常に厳しいんです。それで、「課題が厳しいために、この学校は普通の先生ではやっていけない。AランクあるいはGランクの先生を引っ張ってこないとこの学校は成り立たない」と清輝小学校の校長がおっしゃっていたんです。「私どもの学校は、学校運営協議会設置校で、人事権を持っているから、会長は退職校長さんがずっとやっているんですけども、会長さんと一緒に岡山市の教育長のところに行って、私どもの学校はこういう地域の学校で、普通の先生ではとても務まらないから、Gランクの先生を振り向けてくれという談判に行くんだ」という話をしていました。だから、厳しい学校だから、結構普通の学校と先生方のあれが違うなという、きちんとしたというか、ほかの学校もきちんとしているんですが、結構使命感を持っている先生が多いなと思ったら、そういうことだったみたいです。それは、別の学校にしてみれば、そういう指定を受けているからあの学校はいい思いをしているという面もあるのかもしれないけれども、だからそういう使い方もあるのかとは思ったんです。

○安藤委員　でも、「この先生が気に入らないから、うちの学校から出ていってください」と言っても、その先生はどこかの学校でまた先生をしているわけですね。だとしたら、私は、その先生自身にもうちょっと向上してもらえるように、それこそ地域の方、それから学校の中の先生方の力でと考えたいですけども、自分のところにさえいなくなってしまうばいいという考えがどうも……。

「信頼される学校づくり」の主な論点の一番上に「若手教員の育成プログラム」云々とあるんですけども、実は私は前回の会で余りにもオブラートに包んでしまって、多分皆様に伝わらなかったと思うんですけども、前回の会で私が最後に言いたかったのは、子どもたちが塾なりなんなりに行って、結構学力は高いんですけども、そういう子どもたちが若い先生たちの授業を批判してしまうんです。それは、確かにその先生はまだ若いんだし、授業のレベルはきっと低いんだろうけれども、それはその先生を育てていかなければいけないという部分もあって、なぜ子どもが批判するのかといたら、多分その後ろに親がいると思うんです。だから、親の意識を変えていかなければいけないというのがあって、私はもしかしたら武蔵野市で一番やらなければいけないことは親教育・家庭教育なのかなと思っています。だから、育てていくという部分も考えつつ、教育力を人事権にまで及んで排除していくというよりも、そのように考えていきたいなという思いはあります。

4月に母親たちは、どの先生が自分のクラスの担任になるかということで非常にキリキリしています。指導能力の高い先生になってもらいたいという気持ちは非常にたく

さんあるようです。実は私は、もう22になる娘が小学校1年生に入ったときに、初めての小学校だったんですけれども、新任の先生でした。そのときに、年配の同じ学年の多分学年主任の先生だと思うんですけれども、「この先生が1年後に、もう1年先生を続けていようと思う気持ちになるように、皆さん、育ててくださいね」とおっしゃったんです。それがすごくよかったなど。もしその言葉を聞いていなければ、私たち新米の母親たちは「新任の先生で嫌だ嫌だ」などと言い出したかもしれないんですけれども、そういう気持ちをもっともっと若い親御さんに持ってもらうなければいけないと思うし、もしそういうことで若い保護者の方たちがやんややんや言い出したときに、地域の先輩たちが「いやいや、君たち、そうは言うけれども」というぐらいのことを保護者に言えるぐらいの力が「開かれた学校づくり」のメンバーにあればいいななどと思ったときもありました。だから、人事権なんかに及ばなくてもいいんじゃないかなと私は思うのですが。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

もう9時で終わりの時間ですけれども、本郷さん、何かご意見をお願いできれば。

○本郷委員 この辺の話は全く知らなかったもので、きょう皆さんのお話を聞いてやっとわかった次第なんですけれども、一応今聞いた中でまとめて考えてみると、学校は校長先生ありきで学校が成り立っていないとできないのではないかなとは思いました。特にそこに地域が入ってどうのこうのではなくて、まず学校が学校としての立場を考えていただいて、そこに、この学校支援地域本部というのが、例えば市役所の中に1カ所あればいいのかなというのを私は思いました。そこで、例えば今やっている協働センターみたいな感じで、登録制であって、そこで審査とか精査して、市民の中からこういう人たちがいると判断して、ただコーディネーターは紹介をするだけ、こういうプランがありますよと。逆に、学校の校長先生は、こういうプランはありませんかと期待していただく。そこでコーディネーターがまた地域に募集をかけて、こういうことができる人はいませんか、お互いにやっていけば、何かいい状態になるのかなと。例えば部活動の支援で、野球の人たちを登録しておくとか、あるいは理科のできる人たちを登録しておく、英語のできる人たちを登録しておく。それは中心にあればいいだけで、特に学校の中に居場所を求めることはないのかなと思いました。

それと、では地域の間人が、私が何か授業を45分、90分任されたとしても、いきなりはできないと思いますので、そこで何か指導していただける人がいないといけないと思いますし、さらにそれがボランティアだったら、責任ということが生まれませんので、どうしても有償でやったほうが責任を感じるということで、この事業に対してちゃんと

自分の知識をさらに発達させていけば、その人たちもさらに高みに臨めますし、学校だけがよくなるのではなくて、地域もよくなないと、私が参加している青少協などもそうなんですけれども、地域が高い才能を持っていないとできないと思いますので、その辺でやっていけば、とてもいい感じになれるのかなと思ひまして、きょうの話を聞かせていただきました。

以上です。

○葉養委員長 どうもありがとうございました。

ちょっと不手際で時間をオーバーしておりますけれども、親教育の問題というのは、私も親ですけれども、親自身の資質を問われている面はあります。また、親もかなり世代差があったりとか、相当意識差があります。若い親の方々と、我々などは団塊の世代ですけれども、相当意識差がある。それともう一つは、先生の世界にもかなり世代差が当然あるわけで、若手の先生が比較的どこの地域でもふえていますので、そういう若手の先生に力をつけていただくというのが基本的に重要なことだと思います。では具体的にどういう取り組みをしたらいいとか、その辺をこの次にできればと思うんです。特に親の問題は結構難しいんです。何を具体的にやれば、親としての役割・使命というものを徹底できるか。いろいろな工夫をやってはいますけれども、小平とかでは親の支援のプラットフォームがありますが、あそこは都の事業のモデル地区になっているんですけれども、親に対する支援とか働きかけというのは非常に難しい。ただ、「0123吉祥寺」がある地域ですが、あれは非常に全国区で評価されている仕組みです。ああいうものに対してもう少し拡大するような支援の体制というのがあり得るのかどうかとか、何かそういうことも含めて、ちょっと親の問題をぜひ次回にお願いできればと思います。あと、若い先生方、若手の先生方、あるいはリーダー教員となるような中堅層の先生方をどうやってさらに育てていくかという、この辺をぜひ議論としてお願いできればと思います。

それでは、もうよろしいですか。

では、6分ばかりオーバーしてしまいまして、失礼いたしました。本日はどうもありがとうございました。

○隅田指導主事 それでは最後に、次回の日程の確認でございます。お出しいただきましたものをこちらで調整させていただきましたので、ただいまから4月、5月、6月についてお伝えいたします。よろしいでしょうか。4月21日火曜日。5月は同じく21日木曜日になります。6月は30日火曜日。ということでよろしいでしょうか。

○磯川委員 時間は一緒でいいんですか。

○隅田指導主事 はい、7時から9時、19時から21時でございます。会場につきましてはまた別途ご案内をいたします。ありがとうございます。

事務局からは以上でございますので、委員長、最後に。

○葉養委員長 本日は長時間、どうもありがとうございました。またよろしく願いいたします。

午後 9時07分閉会